

新たな交流展開の第一歩を刻む…………… 1
現代中国の国家・社会関係の諸動向と研究課題
—「群衆路線」をめぐる—…………… 3
2015年秋 朝鮮民主主義人民共和国訪問記 … 4
北東アジアの時事通信……………13
復旦大学国際問題研究院との国際シンポジウム
「中国の内政・外交課題と国際秩序」への参加…14

国際学術会議「タタール世界と日本
—文化・経済・技術の接触と相互関係—」 ……15
人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェ
クト「北東アジア地域研究推進事業」キックオフ・
シンポジウム「北東アジアの再発見」への参加 …16
NEAR短信 ………………18
NEARセンター市民研究員の活動一覧 ……20

新たな交流展開の第一歩を刻む

NEAR副センター長 福原 裕二

「そう言えば、NEARセンター（以下、NEAR）は、国内外の研究機関との学術交流を積極的に推進して、数多くの実績を上げてきたけれども、唯一朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）との（学術）交流はこれまでに試みたことがなかったな」。

思えば今から8年前、NEARは競争的資金を獲得し、「北東アジア地域における『北東アジア研究』の現状と課題」をテーマにした調査研究を実施した。そこでは、20ほどの共通の設問を配したアンケート用紙を準備して、これを北東アジア各国の主要な研究機関に送付し、その回答を基に日本を除く北東アジア各国の研究機関が如何なる「北東アジア研究」を追究しているのかについて調査を行い、その結果を取りまとめた（『北東アジア研究』第18・19合併号、2010年3月所収）。この際、唯一回答を得ることが叶わず、「北東アジア研究」について実態が掴めなかったのが朝鮮の研究機関だった。その時から、朝鮮との学術交流は、少なくとも私にとっては課題となっていた。

とは言え、朝鮮との交流は、日本における偏狭な言説の存在や朝鮮に内在するいくつかの問題性に鑑みると、例え「国家間関係や互いの政治的立場はどうであれ、（学術）交

流は行うべきだ」とする「常識」が齟齬にされ、歓迎されない可能性がある。だが、例えば近年の日本の学会でも、朝鮮との学術交流を推進すべきだとする提起が国内外の研究者によって行われている現実もある（『アジア研究』第61巻第2号、2015年4月）。朝鮮との学術交流は決して奇を衒った考えではないのだ。そんな思いが冒頭の言葉には込められていた。



朝鮮社会科学院にて（2015年11月6日）

詳報はこのあとの豊田研究員の文章に譲りたいが、昨夏の予備的訪朝と約半年間のメールでのやり取りを経て、「NEAR現地調査」としての朝鮮訪問がついに実現した。ここで

特筆しておきたいのは、NEAR研究員の大半が朝鮮経験を得てそれぞれなりの知見を有するようになったことと、それら研究員が朝鮮社会科学院を直接訪問して、科学指導局の沈昇建（シム・スンゴン）局長ほかの方々と顔合わせを行い、社会科学院の研究機構の概要や研究のあり方を伺うとともに、今後学術交流の内容を詰めていくことなどを約し、機関間交流の先鞭をつけたこと、そして今回の訪朝実現には、朝鮮国際旅行社の方々をはじめとする朝鮮側の多大な努力が払われたことである。

私は近著の『北東アジアと朝鮮半島研究』（国際書院、2015年）において、「近接性の齟齬」という問題を提起した。畢竟、「日本-朝鮮半島の必要性、実質に伴う交流のすすめ」であるが、NEARと社会科学院との交流も、学術的な問題意識や研究課題を共有するなど、実質的で調和が取れたものでなければ一過性の交わりで終わってしまうし、そうなっては折角のこれまでの努力が水泡に帰すと思っている。

この点でNEARは各研究員の個別の研究領域の多様性や、研究ユニットを基礎とする組織的研究の広がり、またそれらが具体的且つ国内外へ向けて横断的な共同研究事業に結びついている現状において、十分に社会科学院と学術交流を図ることができる土台を備えていると考えている。

例えば私の場合で恐縮だが、生活圏や漁業を切り口に日本海（朝鮮では「朝鮮東海」）の公共財化をめぐる研究を行っており、朝鮮の水産業を中心とした朝鮮東海の利用状況などは是非現地で調査してみたいと思うし、日朝関係研究の一環として民間に委ねられてきた日朝間の漁業をめぐる交渉・交流を共同で検討できないかとも考えている。ちなみに、かかる個別研究は、来年度から本格実施される国際的な共同研究事業での分担課題とも重なっており、その成果は広く国内外に共有される見通しである。また、私がNEAR研究員と組織的に進めている研究に、「北東アジア国際関係における『心の問題』」があるが、調査研究を通じてその問題性に肉薄し、これ

を克服するための方策を考察するためには朝鮮の専門家との対話やその知見に立脚することも必要であることは言うまでもない。このように、北東アジア地域に根差し、その地域との共栄共存を探求しつつ、地域研究の最前線を構築すべく努力しているNEARの研究員であってみれば、こうした研究事情は私と大差ないだろうと思う。



朝鮮社会科学院の敷地内に掲げられている「同志愛の歌」のレリーフ

とは言うものの、新たな交流は緒に就いたばかりである。実質的で調和が取れた研究交流を進めるためには未だ双方ともに知らないことが多すぎる。まずは属人的な交流にならざるを得ないと思われるから、その尖兵として私の学術的な問題意識や研究課題を率直にぶつけ、その反応を伺い、第二歩目を刻みたいと思っている。

北東アジアの研究最前線

現代中国の国家・社会関係の諸動向と研究課題 —「群衆路線」をめぐる—

NEARセンター研究員

江口 伸吾

近年、現代中国の国家・社会関係に関する研究は、着実に積み重ねられている。その代表的な研究の一つとして、党・国家の動向に焦点を当てた菱田雅晴編著『中国共産党のサバイバル戦略』（三和書籍、2012年）がある。また、市民社会の動向からみた研究として、李妍焱『中国の市民社会—動き出す草の根NGO—』（岩波書店、2012年）がある。さらに広く北東アジアの文脈で比較考察したものとして、大賀哲編『北東アジアの市民社会—投企と紐帯—』（国際書院、2013年）があげられるであろう。以上をみると、多様な観点から国家・社会関係をめぐる考察が深められていることがわかる。

他方、これらの著書の刊行以後の顕著な動向の一つとして、党・国家が社会への関与を強める機会が増大したことがあげられる。すなわち、2013年4月19日、党による「群衆路線教育実践活動」を展開することが決定され、「党の先進性と純潔性を保持し、全党が人民のために実務に励み、清廉であること」を目的に掲げて、改革開放期において蓄積された腐敗・格差などの深刻化する諸問題で乖離しつつある党と大衆との関係の再構築を図ろうとする試みが進められた。これにより、党・国家が大衆、とくに改革開放の過程で周辺化された人々の同意を再調達する活動を活発化させた。

この「群衆路線」は、主として、①党員の道德教育による綱紀肅正、②反腐敗運動の推進、③党員の民衆への奉仕活動と民生向上の試みの積極化、などとして展開されている。また、その方法は毛沢東期に淵源を見出せるとともに、中国の政治文化とも強い親和性をもつ。中国では、歴史的に官僚制支配とそれに付随する腐敗が問題化され続けてきたが、現代中国における党・国家体制においても継承され、現在の「群衆路線」では、それに対処するため、天人相関に基づいた経世済民といった伝統的な徳治主義のガバナンスと部分

的に重なりながら、党・国家の支配エリート層の道德意識に関する教育と民生向上の推進が強化されていると考えられる。

これが、政治社会に与えた影響は大きい。たとえば、延安整風運動時に提唱された「照鏡子、正衣冠、洗洗澡、治治病（鏡に照らし、身なりを正し、身を清潔にし、病を治す）」のスローガンが用いられて「自己批判」を通じた党員のモラル向上が図られるとともに、中央政治局常務委員を務めた周永康をはじめとして多くの政治家・党員が腐敗問題で失脚した。また、民衆の民生向上を図る取り組みも各地で本格化し、「民心」の獲得が目指されている。なお、ジョセフ・ナイは、中国紙とのインタビューで、このような反腐敗の諸政策は、中国のソフト・パワーの向上に資するとして一定の評価を与えている（約瑟夫・奈「反腐敗就是增加中国共産党的軟實力」谷棣・謝戎彬主編『我們誤判了中國』華文出版社、2015年）。

また、これは伝統的な徳治主義のガバナンスの側面を有するがゆえの問題点も内包する。すなわち、政治と道德が分離していない中国の政治文化の上に成り立つ現在の脆弱な法治システムにおいて、党員の道德の問題が教育に止まらずに政治運動へと転化する際、善悪の価値判断が法を超えて政治闘争へと発展しやすく、政治社会が混乱する可能性が高まる。それは綱紀肅正の雰囲気社会に浸透し、反腐敗運動もこれまでになく徹底化されるなか、その懸念も深まる。「群衆路線」の推進は、単に近年の党・国家による社会への関与の強化ばかりでなく、中国的な国家・社会関係の複雑性やその根深い問題も明らかにする。

「群衆路線」の肯定的・否定的効果について、中国の政治文化に留意してみたが、いずれにせよ党・国家が主導するのではなく、むしろそれを相対化するような制度改革を通して腐敗問題を根治しなければならないという課題が残る。たとえば、デイビッド・シャンポーは、反腐敗運動をガバナンスの改善というよりは、むしろ習近平による政治闘争として捉え、その相手の多くは、江沢民のネットワークにあると指摘する。そして、中国の腐敗問題は、政治キャンペーンで克服されることはなく、この問題の根源は、一党支配システム、パトロン・クライアントのネット

ワーク、透明性を欠いた経済、国家にコントロールされたメディア、法の支配の欠如などにあり、政治改革が実施されなければ、共産党支配の終わりが始まると批判している (David Shambaugh, “The Coming Chinese Crackup,” *The Wall Street Journal*, March 6, 2015.)。

2014年12月、習近平は江蘇省視察の際、同年11月に提唱した「三つの全面（「小康社会の全面的建設」「改革の全面的深化」「全面的な法による国家統治）」に「全面的な厳しい党内統治」を加えた「四つの全面」を提唱し、改革開放と社会主義現代化建設の新段階に入ることを強調した。これは、「三つの全面」で強調される改革開放以来の近代化に基づく統治を進める一方、それに単線的に収斂するのではなく、「全面的な厳しい党内統治」によって腐敗問題対策を強化し、その手段の一つとして伝統的な社会的資源に根差した統治方法を「四つの全面」として組み入れることによって、複層的に構成されるガバナンスの再構築を進めていることを示していよう。

なお、本稿の詳細については、拙稿「現代中国の国家建設と『公民社会』のガバナンス—市民社会・ボトムアップ型国家コーポラティズム・人民社会をめぐる—」(宇野重昭・江口伸吾・李曉東編著『中国式発展の独自性と普遍性—「中国模式」の提起をめぐる—』国際書院、2016年3月刊行予定、所収)において検討している。

北東アジアのフィールドから

～現地調査報告～

2015年秋 朝鮮民主主義人民共和国訪問記

NEARセンター研究員

豊田 知世

2015年11月3日から9日の日程で、NEAR研究員・准研究員・客員研究員・名誉研究員12名は研究調査のため、朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）の平壤市や開城市などを訪問した。昨今の日朝関係の悪化から訪問前は少し緊張していたのだが、百聞は一見にしかず、行ってみると随分とイメージが変わっ

た気がする。今回はその調査報告なのだが、外国人が宿泊可能な朝鮮のホテルは限られており、また食事も外国人が対象のレストランに行くことがほとんどだった。そのため、一般の朝鮮ではない部分を多く見てきたのだと思うが、出来るだけ見たままの朝鮮について書いていきたい。

11月3日（火・祝日）：日本出国→中国瀋陽入り

今回の調査に参加したメンバーはそれぞれ各地から福岡空港に集合した後、18時15分発の飛行機に乗り、上海を経由し、深夜に中国の瀋陽のホテルに到着した。ホテルは朝鮮資本で運営されており、同ホテルに入っている旅行会社を通じてビザを申請することができる。ビザは事前に申請してあり、翌朝ビザを受け取る予定である。ホテルの部屋に入ると0時を回っていた。浜田市から出発したメンバーは、10時半に大学に集合し、公用車にて福岡空港に向っていたため、移動だけの一日だった。

11月4日（水）：中国出国→平壤入り

快晴。時間がたつにつれて霧が濃くなってきたが、早朝は青空が見えさわやかな朝だった。瀋陽は、かつて重工業が盛んな都市であり、中国の5大都市の一つだった。改革開放後の国営企業の倒産によって、大きな経済的ダメージを受けた都市でもある。当時は「外にシャツを干すと破れている」と言われるほど大気汚染が深刻だったようだが、深刻な状況からは改善されたようだった。



レトロな雰囲気の高麗航空の機内トイレ

午前中にビザを受け取り、高麗航空156便で平壤へと向う。機内では黄色いサイダーが配られ、TVスクリーンが降りてきた。歌謡の映像が流れ、飛行機内には彼女たちの歌声が響いている。飛行時間は1時間半程度。高度が下がってくると、木が一本も無い茶色い山が姿を現した。山の木はほとんど切られており、その斜面と見渡す限りの平地には茶色い田畑が広がっていた。



機内には彼女たちの歌声が響いていた

空港に到着すると、入国審査で荷物の電化製品と書籍の中身を入念に調べられ（中には一時預かりにされたり、没収されたりしたものもあった）、今回のツアーをアレンジしていただいた朝鮮国際旅行社の李泰日さんらに会う。空港からホテルまでは借り上げていた小型バスで向かう。「ここでは金日成主席、金正日総書記、金正恩第1書記、もしくは金日成様、金正日様と呼ぶほうがいい」ことや、「軍事施設や建設中の建物の写真禁止」といった諸注意を受ける。郷に入っては郷に従えということで、お互いの国の文化を尊重する行動が求められた。

ガイドの李さんは、「日朝双方の国では、ニュースや報道によって良いイメージを持たない人が多い。日本の朝鮮観光者も年々減少しており、文化交流を含めると500名程度だが、その内観光客は年間150名程度しかない。今回のリサーチツアーを通して、皆さんには朝鮮のありのままの様子を日本や大学の学生に伝えて欲しい。そしてそのことが、日朝関係の友好につながれば嬉しい」と話されていた。



朝鮮の凱旋門

ホテルのチェックイン前にフランスの凱旋門よりも10メートル高い朝鮮の凱旋門を視察した。周辺には地下鉄の駅や映画館、夜間のみ運営している遊園地があった。地下鉄出入口付近では、仕事や学校帰りの人達が帰宅を急いでいる。街灯はほとんど設置されておらず、建物から漏れてくる光もほとんど無い。日が暮れるとともに、あたりも闇に溶け込んでいき、遊園地のイルミネーションの光が浮かび上がってきた。暗いが、歩いている人や周りの建物を見る限り、日本とあまり変わらない景色のように思えた。夕食は石焼きビビンバのレストランへ案内してもらった。韓国のビビンバよりも少し味が薄く、素朴な味がした。



夜のみ開園する遊園地

11月5日（木）：平壤市内視察

午前は錦繡山太陽宮殿、錦繡山太陽宮殿広場、そして三大革命展示館へ訪問した。錦繡山太陽宮殿は、金日成と金正日の遺体が永久保存してある施設であり、参拝するには、正装が求められる。荷物をすべて入り口で預け、動く歩道の上に立ち、宮殿入り口へと運ばれる。

私たちの他にも多くの外国人観光客や朝鮮の方々も正装し、動く歩道までの順番を待っていた。朝鮮のほとんどの人の胸には、党員を表すバッジがつけられている。そのため、地元の人か外国からの観光客かは、バッジを確認すればだいたい分かる。バッジは13歳からつけるようだった。宮殿内に足を踏み入ると、見上げるほどの金日成と金正日の像が建っている。像に向かって敬礼し、内部へと歩みを進める。壁の両側には若かりし日の金日成と金正日の功績を表した写真が飾られていた。



錦繡山太陽宮殿広場での集合写真

エアシャワーを通り抜け、赤黒いライトで照らされた金日成の遺体が安置してある部屋へ入る。金日成の遺体はガラスの囲いに覆われ、部屋の中央の台の上に横たえられていた。足側、左側、右側で一礼をしながら遺体を一周する。遺体は生前の姿と変わらず、綺麗なまま保存されていた。その後、またエアシャワーを通り、金正日の遺体が安置してある部屋を参拝した。遺体が安置されている部屋の他、国際交流の証として海外から送られたメダルや賞状などが展示されている部屋や、移動に使用した車や鉄道が展示してある部屋もあった。再度動く歩道に乗って宮殿から戻っ

ていると、これから参拝に向かう多くの朝鮮の方々とはすれ違った。女性の多くはチマチョゴリを着ており華やかな雰囲気だが、話している人はほとんどおらず、無言で動く歩道の上に立ち、静かに参拝に向われていた。



太陽宮殿広場の芝を手入れする人々

次に、三大革命展示館（思想・技術・文化の三大革命）に向かった。同じ敷地内には主体思想労働展示館もあったが、私たちは宇宙開発に関する模型や資料などが展示してある宇宙館に訪問した。宇宙館の外観は土星の形をしており、その表面には太陽光パネルが貼られている。内部の展示場には、1998年に初めて打ち上げた人工衛星の光明星1号の模型など、朝鮮の宇宙開発の歴史に関する資料が展示されていた。照明が落とされ、人工衛星打ち上げの映像を用いた説明があった。土星の球体の内側はプラネタリウムになっており、見上げると朝鮮で見られる星空がぼんやりと映し出されていた。重工業館は、時間の関係から外観のみの見学となった。重工業館の周りには工業用の国産車および国産機関車などが展示してあった。朝鮮でも国産車が製造されており、5社ほどの企業がある。「平和」メーカーが製造している車はそのほとんどのようだった。



宇宙館の外観



重工業館の外には国産の自動車や
機関車などが展示されてある

昼食はそば粉で作られた平壤冷麺（チェンバンククス）。朝鮮では毎食一度は麺を食べるほど麺好きなのだが、そば粉は貴重であるため、家庭ではトウモロコシ粉で作られた冷麺を食べることが多い。韓国で食べる冷麺と同じような味わいだ。

午後は、外国語書店に行き、各自関連資料を調べた後、金日成総合大学を訪問した。金日成総合大学は1946年に創立された国立の総合大学であり、14の学部からなる。開学当初は1,500人程度だったが、現在は20,000人の学生が在籍している。男女比は学部によって異なるが、平均6対4のようだった。図書館を中心に、コンピューター室や遠隔授業が実施される教室を見学させていただいた。



人工衛星の光明星3号の模型



地球の地軸の傾きを観察中



金日成総合大学にはその卒業生である
金正日総書記の銅像が建てられている



赤いネクタイと制服を着用している大学生

金日成総合大学の教員には、教員用の住宅があてがわれているが、最近新たに300世帯が入居可能の教員用の高級高層住宅が建設された。この高級住宅は朝鮮の雑誌などでたびたび紹介されている。今回私たちは、「特別な配慮」によって最初の入居者として選ばれた一家を訪問させていただいた。部屋につくと、85歳のおばあさんと金日成総合大学の教員の奥様が私たちを出迎えてくれた。住居は4LDKと大変広く、家具はすべて備え付けられていた。



金日成総合大学の教員用宿舎

この家にいた85歳のおばあさんは、日本からの帰国者であり、30歳まで東京に住んでいたようだった。中学を卒業し洋裁の仕事に就いていたが、1953年朝鮮戦争休戦の知らせを聞くと、母国のために力になりたいと、志願して建築を専攻していたご主人と一緒に朝鮮に帰国した。終戦後の平壤は焼け野原で文字通りなにもない状況だったが、ご主人は建築士だったので復興に大きく貢献したと、少しだけ日本語を交えながら話していただいた。

子ども達も大学に進学させ、それぞれ独立している。そのうちの一人が金日成総合大学の教員であり、今回入居者に選ばれたようだった。対象となる教員は28歳から65歳までと幅広い年齢層が対象とされている。この住宅地をモデルとし、新たな大学教員用の高級住宅が次々と建築されているようだった。



日本からの帰国者の女性からお話を伺った

この日の行程の最後に地下鉄を視察した¹。平壤市は人口300万人であり、150万人が都市、残りの150万人が郊外に住んでいる。市民の公共交通手段は地下鉄、トロリーバス、路面電車であり、運賃は5朝鮮ウォン（1朝鮮ウォン=0.85日本円）である。最もよく利用されている交通手段が地下鉄であり平日は30万人、休日には40万人が利用している。地下鉄は地下深くに作られており、これまで乗ったことがないほど長いエスカレーターに乗り、地下へと降りていった。地下鉄構内の天井にはシャンデリアが飾られており、柱と柱には彫刻が彫られていた。地下鉄は3つのライン（革新・千里馬・万景台線）が走っており、運行時間は朝5時半から夜23時、平均10分おき、ピーク時には3分おきに運転しているようだった。復興駅、栄光駅、凱旋駅と3つの駅の構内を視察したが、どれも色鮮やかな壁画が描かれていた。

¹地下鉄は「電車」だが、電線は無い。電気はレールから取っている。地下鉄用の電気は火力発電所から引いている。



地下鉄に乗るために長いエスカレータを下っていく



地下鉄「復興駅」の様子

11月6日（金）：韓国との軍事境界線の町、開城市。社会科学院

小型バスで約2時間半かけて、38度線の板門店へ向う。平壤から高速道路がつながっているが、悪路のため車内の振動が非常に大きい。この日はほとんどバスに乗っていたのだが、村井研究員の万歩計は振動によって32,000歩を記録するほどだった。高速道路はほとんど利用されておらず、すれ違う車を見かけなかった。朝鮮の行政区域は9つの道からなるが、その内の4つの黄海北道を横断する事になる。窓の外には、はげ山と、薄茶色の収穫後の農地風景が続く。

朝鮮半島は、北部は山林が多く、南部は穀倉地帯が多い。そのため、北部朝鮮の8割は山岳地帯である。以前は森林資源が豊かだったが、過剰な伐採が続いたため、今ではほぼすべての山に木が生えていない。10年ほど前から植林政策が始まったため、所々に植林の後が見えるが、森林資源が豊富な山を見ることはなかった。一度サービスエリアで休憩をした後、3ヶ所の検問所を通過し、板門店に

到着した。



高速道路はひたすら直線だが悪路

韓国と朝鮮の境界線は、275kmの鉄格子で区切られている。その軍事境界線から南北それぞれの領域2kmは非武装地帯に設定されており、この中では兵士はピストルの所持しか認められていない。朝鮮側の非武装地帯の中にも村があり、畑では白菜が収穫されていた。バスで2kmの非武装地帯を渡り、境界線から数十メートルの地点まで移動した。朝鮮側から視察していることから、境界線手前には朝鮮側の兵士が整列していた。境界線上には、5, 6の水色の小さな建物が双方の領土にまたがって建てられており、その中の一つでは軍事停戦委員会・南北対話のために1万回以上も会議が行われたようだった。遠く前方には、韓国の国旗がたなびいている。鉄格子のない境界線はこの場所だけであるが、緊張した雰囲気を感じられた。



山の木はほとんど伐採されている



韓国との境界線。水色の建物の真ん中で分かれている



案内役の兵士



境界線の拡大



高麗成均館では結婚式の写真撮影が行われていた

案内していただいた兵士と別れ際握手をすると、とても強い力で握りかえし、境界線に勤める兵士は一人で100人を相手に対戦するように訓練すると教えてくれた。また、日本もアメリカに原爆を落とされたため、同じ苦しみをもっていると思う。朝鮮の歴史についても正しく理解して欲しいと言われた。板門店視察後は、2013年に世界遺産に認定された高麗成均館（歴史博物館）を見学し、高麗人参の入った参鶏湯を食べた後、平壤市内へと戻った。

平壤市内に戻った後、大同門を観覧後、朝鮮社会科学院に訪問した。社会科学院は、1952年に設立されたシンクタンクであり、哲学、経済学、法学、語学、歴史学、考古学などを対象に、朝鮮内の大学や研究所を統一的に管理している機関である。朝鮮戦争のまっただ中だが、新しい国を目指して設置されたようだ。社会科学院の院長は、朝鮮の社会科学指導委員会の委員も務めており、政策にも大きく関わっている。



社会科学院での会議の様子 1



社会科学院での会議の様子2

朝鮮の大学や研究所の大学教員や研究者が行う研究について、社会科学院が関与し、研究方法などを指導している。社会科学院の下には、上に挙げた哲学、経済学などの部門別の学会が設置されており、それぞれの学会の学会長は、社会科学院のメンバーが務めている。学会で提議される問題は、社会科学指導委員会のなかでの話し合いのもと、政策実現に向けて研究される。実務的な課題を解決するために、ふたつの手法がとられている。一つは、社会科学院の学生を大学や各省庁に派遣し、学生がそれぞれの課題を研究しながら、問題解決に向けた政策提言を行う手法であり、現在100人ほどの学生が各省庁に派遣されている。もう一つは、学会や大学で提議される問題について社会科学院内で議論する手法である。質疑応答の時間がとられ、私たちの質問に関しても回答していただいたり、今後の研究交流の可能性について議論を行った。

11月7日（土）：平壤市内視察

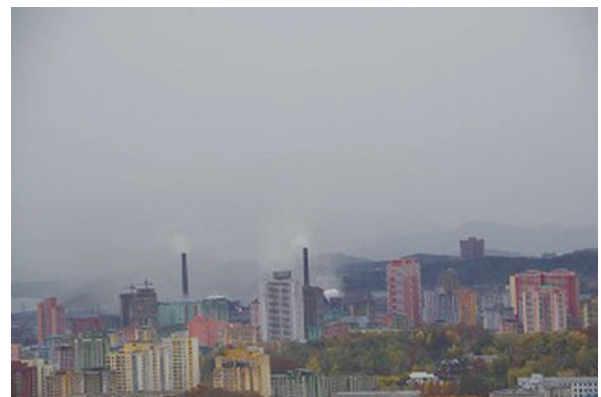
この日は主体思想塔、万寿台大記念碑、人民大学習堂、祖国解放戦争勝利記念館などの平壤市内の主要施設を視察した後、中学校へ訪問した。

主体思想塔は、1982年に金日成の70歳の誕生日を記念して建設された170メートルの塔である。頂上には炎のオブジェが載っており、夜になると赤く光っていた。塔の下には、労働者、知識人、農民が手を掲げる銅像が建てられている。地上から150メートルの高さには展望台が作られており、平壤市内を一望することが出来る。展望台に登ると、眼下には

大同江が流れており、10隻ほどの船が運行している。高層ビルのすぐそばに、平壤第一火力発電所の高い煙突が突き出ている。老朽化や大気環境にも考慮し、近く廃止されるようだったが、火力発電所の近くまで街が拡張したため、都市の中に火力発電所があるように見える。遠くに新しい火力発電所の煙突が二本見えているが、平壤市の電力供給はそこに統一されるようだ。



主体思想塔



平壤市内にある平壤第一火力発電所

朝鮮は石炭を産出しているが、日本の新聞でもしばしば取り上げられているように、慢性的な電力不足であり、電力の安定供給が課題となっている。私たちが訪問中は、1度しか停電にならなかったが、節電か停電対策なのか、マンションのベランダには太陽光パネルを設置している家が多かった。軍事境界線近くの開城市では、ほぼすべてのマンションの窓に太陽光パネルが取り付けられ、花（赤い花。おそらく牡丹かバラ）を育てているようだった。

午前の最後の行程では、人民大学習堂へ訪

問した。人民大学習堂は通信総合大学と図書館の機能を併せた施設である。収容能力は1万2,000人であり、部屋は約600室である。閲覧室のほか、音楽館観賞室もあり、日本語の楽曲も（独自に編集され）CD化されて聞けるようになっていた。さらに、講義室や問答室（質疑応答室）なども完備されている。平均で毎日約5,000人が利用しており、質問等があれば人民大学習堂に所属する研究者に質問する事が出来る。また、講義も行われており、パソコンを用いたプログラム開発などの授業を無料で受講することが出来る。外国の著書も所蔵されており、日本語の書籍も拝読することが出来、ガイド役の方がわざわざ日本語書籍を用意して見せてくれた。



人民大学習堂の問答室



人民大学習堂の講義の様子。受講料は無料



図書検索システム



閲覧室

午後からは、祖国解放戦争勝利記念館へ訪問した。携帯電話の持ち込み禁止で、記念館の屋内の写真撮影は禁止されていた。記念館の外には、プエブロ号の展が展示してあり、内部を見学することが出来た。また、朝鮮戦争で使用されていた戦車のほか、打ち落とされたアメリカ軍のヘリコプターなども戦利品として展示されていた。勝利記念館の屋内に入って朝鮮戦争の説明を聞いた。1974年に制作された朝鮮戦争時の様子を大規模なパノラマで表した模型と絵画が設置された部屋もあった。しかし、義勇軍やソビエト軍の説明は省かれていた。

夕方には平壤6月9日龍北中学校に訪問し、歌を歌いながら踊る生徒の様子や教室内を見学させていただいた。朝鮮は2014年から1年間の就学前学習、5年間の小学校、3年間の初等中学校、3年間の高等中学校の12年間の義務教育制度となっている。初等中学校では、午前は教室で勉強し、一度昼食を食べに家に帰った後、午後は専門的な学習を行う。理科学習や文化学習、演劇や体育など、専門

技術を身につける。各区域には、偏差値の高い子を対象にした第一初等中学校があり、近年多くの市民は教育に力を入れており、競争が激しくなっているようだった。



中学校の標本室



歌や踊りを披露していただいた

11月8日（日）：鉄道で中国へ渡る

行きは飛行機を利用したが、帰りは鉄道で国境を越える。10時10分平壤駅発の鉄道に乗り、出国審査が行われる新義州駅へと向う。車両は3段の寝台ベッドになっている。車窓の外には、相変わらず木の生えていない山と収穫が終わった畑の茶色い風景が続く。朝鮮では、主に主食である米とトウモロコシを栽培しているが、食料不足のため豆やジャガイモの栽培もはじめたようだったが、耕作シーズンから外れていたため見ることはできなかった。また、漁業はナマズを養殖していたが、最近では鮭、スッポン、チョウザメなどの養殖も行われるようになったようだった。

新義州駅に到着すると、出国審査が始まった。全員のパスポートが集められ、朝鮮内で撮影した写真や荷物のチェックが行われた。

携帯の写真は、一人ずつ名前が呼ばれ、朝鮮内で撮影された写真がチェックされた。鉄道の車窓から取った写真を消されている人もいた。荷物は今回男性のみが調べられ、カメラはランダムでチェックがあった。2時間ほど出国審査のために停車した後、鴨緑江を数分で渡って17時前に中国側の国境の駅である丹東駅に到着した。

丹東駅からは中型タクシーで大連市内のホテルに向う。途中で高速のサービスエリアで中華料理の夕食を食べる。朝鮮の食事と比べると味が濃く感じた。ホテルにつくと23時を過ぎていた。

11月9日（月）：帰国日

5時にホテルのロビーに集合し、空港へ向う。国内線で上海を経由して17時過ぎごろ福岡空港に到着する。大学に帰る人たちは大学の公用車で大学へと戻る。浜田に着くと23時を過ぎていた。

北東アジアの時事通信

NEARセンター研究員

高 一

2015年12月11日、南北朝鮮間での当局者会談が開城工業団地で行われている。「行われている」と現在進行形になっているのは、原稿執筆中に「南北当局者会談第1回全体会議終了」とのニュースに接したからである（原稿締め切りは12月11日）。報道によれば、北側代表は「北南関係に春の光が差すようにしましょう」と挨拶し、南側代表は「我々が道を整え、統一への大きな道を用意しましょう」と応じ、穏やかなムードで会談がスタートしたとのことであった。

ようやくここまでたどり着いたな、という感がある。8月、南北朝鮮は一触即発の危機にあったことを考えると、会談開催にこぎつけたことだけでも関係改善が図られたといえよう。8月4日に起きた非武装地帯での地雷爆発をきっかけにして、南北間の軍事的緊張は一気に高まった。南による対北宣伝放送の開始や

北による準戦時体制突入宣言は、相互に緊張を強いるものであった。危機的状況のなか、南北双方は自制心を発揮し、「2+2」の南北高位級による「マラソン会談」とも評される43時間にもわたる会談を経て、軍事的緊張は鎮静化の方向へと向かうことになったのである。南北は、8月25日、軍事的緊張を緩和する措置をとるとともに、「南北関係を改善するための当局者会談をソウルまたはピョンヤンで早期に開催」することに合意したのであった。

「8.25合意」へと至った過程から、何が明らかになったのであろうか。まず、指摘しておきたいのは、南北双方ともに軍事衝突を望んでいないという点である。そもそも対話を通じて緊張の緩和に努めたという点において、南北双方の自制心を確認することができよう。さらに、このような自制心が生まれざるを得ない前提として、北に対する南の「抑止力」、および南に対する北の「抑止力」が有効に機能しているという点も指摘できるだろう。南北ともに、大規模な軍事衝突が招いてしまう負担に耐えられないのである。南北ともに戦争の不可能性を認識したに違いない。

さて、8月の「危機」は、「南北マラソン会談」を経て、南北関係改善の好機となった。しかしながら、8月に合意された会談の開催が12月にまでずれこんだことに象徴的なように南北関係はなかなか急進展しない。さらに、会談場所が開城工業団地になったことも、シーソーゲームのような南北関係を物語っているようでもある。「南北マラソン会談」における合意では「ソウルかピョンヤン」にて当局者会談を開くとされていた。相互主義の原則に従うとすれば、少なくとも2回の会談開催は担保されたのであろうが、今回の会談が開城工業団地で行われていることは、南北会談の継続的開催に不安の種を残したといえよう。単発のショーで終わる可能性も排除できないのである。

このような悲観的見方には、南北双方が討議を求めている分野に違いがあることも影響を及ぼしている。南は離散家族再開を最優先事項としており、北は金剛山観光の再開を求めている。このような南北間の隔たりによって、実際に当局者会談で協議すべき内容が事前に調整されていないということも、会談が難航しそうだという予想が支配的になっている背景であ

ろう。

それでも南北当局者会談の進展に期待するしかあるまい。南北間の緊張状態の継続よりも、緊張が「1ミリ」でも緩和するほうが、そこに住む人々の暮らし向きがよっぽどましになると思われるからである。8月に南北双方が軍事的緊張の緩和に向けて自制心を発揮したことを想起するならば、人道的・経済的関係の進展に向けて相互に譲歩・妥協することも不可能ではないだろう。（追記：本稿の校正作業をしている2016年3月14日現在、朝鮮半島は一触即発の状態にある。開城工業団地は「閉鎖」され、史上最大規模と称される米韓合同軍事演習が行われている。）

参加学会報告

復旦大学国際問題研究院との国際シンポジウム
「中国の内政・外交課題と国際秩序」への参加

NEARセンター研究員

佐藤 壮

2015年9月22日、復旦大学国際問題研究院との国際シンポジウム「中国の内政・外交課題と国際秩序」を同研究院日本研究センターで開催した。このシンポジウムは平成27年度北東アジア地域学術交流研究助成金共同プロジェクト「中国の台頭と北東アジア地域秩序の変動—中国国内統治との共振性に着目して—」（研究代表：佐藤壮）の研究活動であると同時に、復旦大学国際問題研究院と島根県立大学の学術交流の一環として位置づけられるものである。基調講演および2つのセッションの概要は以下の通り。

基調講演では、井上厚史教授（島根県立大学）が「『一带一路』と『全体大用』—東南・北東アジア国際秩序構想を考える—」、石源華教授（復旦大学同研究院 中国と周辺国家関係研究センター長）が「『一带一路』と中国の周辺協力」と題して講演した。井上教授は、儒教思想の根幹に危機的事態に備え貧民救済に対応する観念があることを見出し、現代の地域統合の先行モードであるEUが直面する債務問題や難民危機をみれば、東南・北東

アジア地域の国際秩序構想に求められるのは現代版「社倉法」および「礼制」ともいべき貧困削減策や域内互惠関係を秩序づくる規則の構築であると指摘した。石教授は、中国の「一帯一路」構想がアメリカのリバランス政策への対抗上、中国による周辺諸国との関係強化策という戦略的側面をもつと指摘し、北朝鮮の核開発問題と日本政府の右傾化に留意しつつ中韓関係の緊密化を梃子に日本やアメリカを牽制し融和を引き出しながら、日本を「一帯一路」構想の枠組みに組み込む必要性を説いた。

セッション1では、江口伸吾教授（島根県立大学）が「『新常态』における中国外交の社会的基盤—現代中国の政治社会統合をめぐる—」、鄭継永副教授が（復旦大学同研究院韓国朝鮮研究センター長）「北朝鮮の経済戦略と中国の対朝外交戦略」、佐藤壮（島根県立大学）が「東アジア地域秩序構想のパラダイムと日中米関係—安全保障と経済の相互関連性—」と題して報告した。江口教授は、R.ダールの「ポリアーキー」概念を援用しつつ、中国では「閉鎖的抑圧体制」の内に「擬似的な競争的寡頭体制」が中長期的に生まれつつあるという仮説を立て、現代中国外交の国内社会的基盤として、「新常态」期にある中国の政治社会統合における「参加」問題の重要性を指摘し、習近平政権の「群衆路線」を通して中国政治社会のガバナンス構築プロセスを論じた。

鄭副教授は、シンポジウム前日まで滞在した北朝鮮での視察に基づき、北朝鮮の国内政治・経済の状況を、金正恩第一書記による政敵粛正後の「平穩・平静・平和」と描写し、平壤市内に限れば国民経済の発展が顕著だと指摘した。また、中朝関係を政治的には冷却状態、経済交流的には「官低民高」状況にあると見なし、中国の対朝外交は、米韓の軍事的圧力にも北朝鮮の核開発にも反対しつつ、北朝鮮の孤立化を解消しながら朝鮮半島の安定化を導くことが重要だと指摘した。佐藤は、現代の東アジアがパワー移行の変動期にあるという認識のもと、安全保障と経済秩序の相互関連性に着目しながら、これまでの東アジア地域における国際秩序の様態として「アジア太平洋パラダイム」と「(拡大) 東アジア

パラダイム」の特徴を整理し、それぞれの地域主義が日本、アメリカ、中国の地域外交戦略に強く規定され（同時に規定してい）るさまを考察した。中国の地域秩序形成構想が新たなパラダイムとなるか否かは、米中関係の動向、「一帯一路」が国際公共財的機能を中長期にわたって果たしうるかどうかを見極める必要があることを指摘した。

セッション2では、豊田知世講師（島根県立大学）が「気候変動対策の国際潮流と中国への期待」、陳雲教授（復旦大学国際関係・公共事務学院）が「中国の都市におけるゴミ戦争の政治経済学—ゴミ焼却（発電）所を巡る住民運動—」と題して報告した。豊田講師は、気候変動や温室効果ガス削減努力をめぐる責任・公平性・経済的功利性に関する国際的議論の潮流と照らし合わせて、中国政府に一層の温室効果ガス排出緩和策推進を促すには、緩和策促進による経済的利点を強調しながら、燃焼効率向上などを達成する技術支援やインフラ設備を先進国から途上国に向けて輸出する必要があると指摘した。陳教授は、中国国内都市におけるゴミ問題（ゴミ処理・ゴミ分別・ゴミ焼却所/発電所建設）をめぐる対立（「ゴミ戦争」）には、動脈産業と静脈産業の対立、生産と生活の対立、都市と農村の対立、官民対立が多重に織り込まれていると論じ、ゴミ問題に関する住民運動の展開は、都市市民の権利意識啓発を促し、中国の政府（地方政府）のガバナンスに対する民衆の不満が噴出する様を分析した。

今回のシンポジウムは、地政学的戦略問題から国内統治課題、環境問題に至るまで多岐にわたる議論が契機となって活発な質疑応答が展開され、大国中国の国際秩序構想と国内統治課題をリンクさせる本プロジェクトの議論を深める上で非常に有益であった。

国際学術会議「タタール世界と日本 —文化・経済・技術の接触と相互関係—」

NEARセンター研究員

井上 治

2015年10月23日（金）、タタールスタン共和国科学アカデミー歴史研究所との共催で標

記の国際学術会議を松江で開催した。

第一セッション「伝統的社会における現代化 ―日本とタタール社会を例に―」では、ラディク・サリホフ氏（タタールスタン科学アカデミー歴史研究所副所長）が「18世紀末から20世紀初頭にかけての伝統的タタール人共同体の近代化」と題し、この時代に世俗的タタール人インテリゲンツィアが形成され、出版や民族ジャーナリズム、その他の市民社会に相応しい諸制度が生まれたことを指摘した。リリヤ・ガブドラフィコヴァ氏（タタールスタン科学アカデミー歴史研究所主任研究員）「20世紀初頭におけるタタール人の日本人イメージ認識」では、タタール人の多くは、日露戦争以後日本を知るようになり、日本が西洋の新しさと民族的伝統を巧みに融合して改革を進めた点で、タタール民族にとって最高の手本となったと論じた。大阪大学元教授の米原謙氏「日本ナショナリズムの光と影 ―陸羯南の例―」では、陸羯南の国民主義を解説しながら、日本の近代化とは中国中心の中華的世界観から西欧中心の世界観への変化であり、他方では日本の独自性としての「国体」の観念が生まれ、アジア主義の展開があったことを述べた。

第二セッション「たたら吹き製鉄の起源と発展」では、角田徳幸氏（鳥根県立古代出雲歴史博物館）「日本古代製鉄の系譜 ―日韓製鉄史の比較から―」では、日本列島における初期の鉄生産は、朝鮮三国時代の地上式竪形炉に日本で技術改良が加えられてできた箱形炉で、砂鉄を原料とする独自の展開を遂げたことを明らかにした。エミル・セイダリエフ氏（タタールスタン科学アカデミー歴史研究所クリミア支所主任研究員）「中世クリミアのクリミア・タタール人における金属採取と金属加工 ―歴史学・考古学的注釈―」では、中世以降のクリミアの鉄採取と加工はまだ十分に研究されていない中、すでに確認された製鉄技術・加工技術を紹介し、こうした学術研究を基盤に手工業を始めとする伝統的な産業が復興しつつあることを述べた。

最後の第三セッション「服部四郎文庫―研究の展望」では、まずラリサ・ウスmanoヴァ氏（タタールスタン科学アカデミー歴史研究所主任研究員）が「服部四郎とタタール人―

学術的・個人的関係」と題し、服部が1933年から36年まで滞在した旧満州ハイラルで作上げたタタール人移民、とくにのちに服部夫人となるマギラ（マヒラ）・アギヤその家族との交流を紹介した。井上治（NEARセンター）「戦中から戦後のモンゴル研究の一断面 ―服部文庫所蔵資料から―」は服部文庫蔵モンゴル関係貴重資料である戦時プロパガンダ誌『FRONT』モンゴル語版と「モゴール語音声資料」の価値を論じた。前者は、当時の大陸政策に学術的に関わったモンゴル研究者や当時日本に留学していた内モンゴル人がその制作に関係したことを述べ、後者はアフガニスタンのモゴール語を服部が1961年に調査した時の録音であり、今はすでに絶滅言語となったと思われる点で大変重要な資料であることを紹介した。マラト・ギバトディノフ（タタールスタン科学アカデミー歴史研究所教育史・理論部門長）が「服部四郎文庫所蔵タタール資料とタタール教育史研究の展望」と題し、服部文庫蔵タタール語資料の刊行地と内容を分類し、そのうち日本と旧満州で刊行された教科書資料に着目し、在日タタール移民の教育システムを明らかにしうることを論じた。

人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」キックオフ・シンポジウム「北東アジアの再発見」への参加

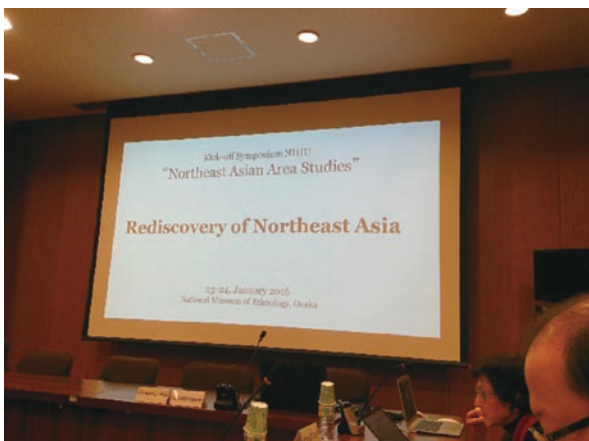
NEARセンター長

井上 厚史

2016年1月23日（土）～24日（日）の二日間、国立民族学博物館第4セミナー室において、人間文化研究機構主催によるネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」のキックオフ・シンポジウムが開催された。

本シンポジウム開催の趣旨は、これまで北アジア、中央アジア、中国、韓国などの地域を対象に、しばしば細分化された従来の研究では得られなかった横断的・汎領域的な研究を、政治経済、歴史、社会文化に関する現代的諸課題の解明や解決を志向する国際共同研

究「基幹研究プロジェクト」を推進するにあたり、中心拠点である国立民族学博物館、および拠点である北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センターが、合わせて5ユニットを構成し、平成28年度より平成33年度までの6年間、国際共同研究を推進するというものであり、その目的は、来年度から開始される国際共同研究のキックオフ会議であり、対象地域とするロシア、モンゴル、中国、韓国に加え、米国および英国からも研究者を招聘し、各国で北東アジアについておこなわれている横断的・汎領域的な研究の最先端を紹介しあうことによって、到達目標を共有することを目的とするものであった。



- 各セッションのテーマは、以下の通りである。
- セッション1：北海道大学主催による「北東アジアではなぜ共同体が成立しなかったのか：1980年代から今日まで」
 - セッション2：富山大学主催による「北東アジアにおける国際分業と資源の持続的利用：課題と可能性」
 - セッション3：島根県立大学主催による「近代的空間形成とモンゴル、中国、満州、朝鮮の動向」
 - セッション4：東北大学主催による「北東アジアの環境・資源をめぐる諸課題」
 - セッション5：国立民族学博物館主催による「北東アジアにおける基層文化とその現代的変容・移動がもたらす同一性と多様性」
- 各セッションとも、海外からの著名な研究者

を招聘し、活発な議論が展開された。ただ、セッションによって本シンポジウムの捉え方の違いがあり、研究テーマの概要説明に終止したり、問題提起をするにとどまるセッションも見られた。

そうした中であって、本学北東アジア地域研究センターが主催したセッション3では、本学の李曉東先生による流麗な司会運営のもとに、井上厚史の「北東アジア諸国は、民族的にも宗教的にも文化的にもきわめて多様な地域であり、現在も移民や領土問題など、多くの懸案事項を抱えている。この複雑な北東アジア地域を分析するためには、従来型の「一国史」、あるいは「東アジア史」「北アジア史」の単なる寄せ集めではなく、「北東アジア地域」をどのように認識するのかについて改めて歴史を遡って考え直す必要がある。本研究ユニットは、この問題に対し、この地域に「近代的空間」が出現する変動過程を、前近代に遡って、歴史的・文化的・思想的観点から分析し直すことにより、同地域が持つ「特性＝アイデンティティ」の抽出を試みることにし、モンゴル、中国、満州、朝鮮という、この地域に近代的空間の出現する上での結節点となる地域に焦点を当て、従来の研究の問題点を指摘し、新しい北東アジア近代史研究の出発点にしたい」という趣旨説明を行い、続いて、黄克武（台湾台北中央研究院近代史研究所特聘研究員）「民族主義の再発見：抗戦時期中国における朝野の“中華民族”議論について」、高熙卓（西江大学校現代政治研究所教授）「韓国における近代化研究の動向：1894-1896年の3年史に関する最新研究を中心に」、劉建輝（国際日本文化研究センター教授）「近代中国東北部（旧満洲）の成立：生態・移民・交易」、井上治（本学大学院北東アジア開発研究科教授）「モンゴルの近代史書に見える歴史空間」という4つの問題提起がなされた。その後に設けられた質疑応答では、活発な議論が交わされ、われわれのテーマが他の研究者にとって大きな関心を持って迎えられていることを実感した。

4つの発表はそれぞれの専門領域における現在の研究の問題点を指摘するものであった。まず、黄克武先生による「中華民族」という概念の成立に関する先鋭的な発表は、多くの研究者の瞠目するところとなり、本研究プロ

プロジェクトにおける中国関連分野の革新的テーマとなることを予想させるようなインパクトを与えるものであった。次に、高熙卓先生による韓国1894-1896年の「恥辱の3年間」に関する問題提起は、これまで韓国の学会でタブー視されてきた領域に関するものであり、韓国（朝鮮）の近代化を考える上での重要な示唆を与えるものであった。劉健輝先生の「満州」成立に関する問題提起、とりわけ満州地域が「封禁」から解禁されて「皇領」へ組み込まれる説明は、詳細な地図や資料の提示とあいまって強い説得力を持つ発表であった。最後に、本学の井上治先生によるモンゴルの「近代史書」成立に関する問題提起、すなわち近代モンゴルの歴史文献に見られる「空間」＝領域認識に焦点が当てられ、会場から活発な意見が出され、この問題の重要性を再確認することができた。



二日目の最後には総合討論が用意されており、全セッションの代表者が参列する中、オラディン・エルデン・ボラグ（ケンブリッジ大学）、およびキャロル・グラック（コロンビア大学教授）両氏による総括コメントがあった。ボラグ先生は、特にモンゴルの専門家として、モンゴルの捉え方に対するコメントがあり、グラック先生は「北東アジア地域」という捉え方は初めて聞く概念であるが、こうした観点からアジアを捉え直すことは大変意義深く、今後の研究の進展を期待したい旨の発言があった。

冒頭にも書いたように、全体を見渡してみると、まだまだ各セッション間の温度差やアプローチの違いが見られ、今後の真摯な研究の発展を待たなければならないという印象を与える面もあったが、総じて各セッションが設定し

たテーマの持つ魅力や先進性が目立つシンポジウムであり、来年度から本格的に開始される北東アジア地域国際共同研究の進展に大きな期待を抱かせるものであった。

最後に、二日目の当日全国的に大寒波が押し寄せ、特に中国山地では記録的な大雪となり、二日目に帰宅しようとした3名は広島市内で足止めとなり、翌日ようやく大学の公用車を利用して、下道を4時間かけて帰還するというハプニングがあった。ただ、そのおかげで車中で研究プロジェクトの今後の進め方等について真摯な意見交換をすることもでき、災い転じて福となすことを実感した次第である。

NEAR短信

(2015年10月～2016年3月)

○第40回日韓・日朝交流史研究会、“心の問題”勉強会10月定例会

【日 時】

2015年10月29日（木）16：30～18：00

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

宋浣範（ソン・ワンボム）氏

「東アジアを横断した外交官“金春秋”の現在の意味」

○“心の問題”勉強会11月定例会

【日 時】

2015年11月26日（木）16：30～18：00

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

佐藤壮准教授（NEAR研究員）

『「心の問題」と国際政治学—紛争後社会における和解の実現と正義の回復の観点から—』

○北東アジア研究会第4回研究会（西周研究会と共催）

【日 時】

2015年11月28日（土）16：00～18：00

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

河野有理（首都大学東京社会科学部研究科・准教授）

「秘密」と「情実」——西周の政治思想をめぐって」

○ “心の問題” 勉強会12月定例会

【日 時】

12月10日（木）16：30～18：00

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

新井健一郎（横浜国立大学助手、NEARセンター客員研究員）

「意味と解釈のポリテクスー〈心の問題〉とはなにか」

○北東アジア研究会第5回例会および第41回日韓・日朝交流史研究会

【日 時】

2015年12月17日（木）15：00～18：00

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【内 容】

(1)研究会……………第1部 [15：00～16：30]
ウォルフガング・ザイフェルト氏（ハイデルベルグ大学名誉教授）

「ヨーロッパにおける北東アジア研究：両国間関係を中心にして（Japanese-Chinese relations, Japanese-Korean relations）」
質疑応答

(2)報告会……………第2部 [16：40～18：00]
＜問題提起①＞「主体思想とは何か：現地での雑感」

崔穎麗（NEARセンター准研究員、島根県立大学大学院生）

＜問題提起②＞「今後の学术交流と日朝関係」
福原裕二（NEARセンター研究員）

質疑応答・意見交換

○第42回日韓・日朝交流史研究会、“心の問題” 勉強会1月定例会

【日 時】

2016年1月7日（木）16：30～18：00

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

金暎根（韓国・高麗大学GLOBAL日本研究院副教授）

「韓国の失われた災害ガバナンス20年と災害復興学—新たな日韓協力アジェンダの模索—」

○北東アジア研究会第6回例会

【日 時】

2016年2月1日（月）9：00～14：45

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【テーマ】

基層社会の自治と「つながり」の形成——中国と日本

セッション1 基層社会の自治と「政治」の役割

李曉東（島根県立大学 教授）

「『百姓社会』：社区自治と『つながり』の形成」

宇野重規（東京大学 教授）

「社会的紐帯の政治哲学—トクヴィルを中心に」

セッション2 基層社会における「つながり」の形成—日本と中国

松永桂子（大阪市立大学 准教授）

「人口減少著しい中山間地域のコミュニティづくり」

肖萍（中国南京大学 准教授）

「中国の都市部における社区ガバナンスシステムの構築—江蘇省を例にして」

○ “心の問題” 勉強会2月定例会

【日 時】

2016年2月12日（金）16：30～18：00

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

坂部晶子氏（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）

「日中における植民地・戦争期の記憶と地域における記憶」

NEARセンター市民研究員の活動一覧

(2015年10月～2016年3月)

○第2回市民研究員研究会の開催

【日時】

2015年12月5日(土) 14:00～16:30

【場所】

講義研究棟1階 中講義室5

【内容】

NEARセンター・アカデミック・サロン

- ・豊田知世NEARセンター研究員「NEARセンター現地調査－朝鮮訪問・視察報告－」市民研究員発表
- ・若林一弘氏「服部文庫の鳥根県関係資料」大学院生との共同研究中間報告
- ・岡崎秀紀氏および大橋美津子氏グループリサーチサロンなど

○NEARセンター市民研究員有志による新年餅つき大会の開催

【日時】

2016年1月30日(土) 9:30～12:00

【場所】

交流センター前玄関および1階研修室

【内容】

特定農業法人ひやころう波佐(浜田市)のご協力のもと餅つきをおこない、鳥根県立大学大学院留学生・浜田市近郊在住の外国人家族・鳥根県立大学教職員家族の交流を図りました。

○第2回市民研究員全体会の開催

【日時】

2016年1月30日(土) 13:30～16:30

【場所】

交流センター2階 コンベンションホール

【内容】

- ・岡崎秀紀氏「出版報告『鳥根とお雇い外国人技術者たち－鳥根の近代化産業遺産物語』」
- ・田中文也氏「日本古代史のリスタートをめざして－2015年の取組みのまとめ」
- ・浜田市の地域活性化に関する政策提言勉強会グループ

- ・若林一弘氏「中国人日本語学習者の漢字能力」

○第3回市民研究員全体会の開催

【日時】

2016年2月28日(日) 13:30～17:00

【場所】

講義研究棟1階 中講義室3

【内容】

開会あいさつ

大学院生と市民研究員の共同研究成果報告

- ・白音淖爾氏(大学院生)、岡崎秀紀氏(市民研究員)「内モンゴルのホルチン地方におけるシャマンの成巫前後の生活変化について」
 - ・文雪梅氏(大学院生)、迫義人氏(市民研究員)「戦前日本在満領事の役割－満州事変前の奉天総領事(事務代理)を中心に」
 - ・石聡氏(大学院生)、大橋美津子氏(市民研究員)「長白山地域の持続可能な発展に対する長白山保護開発区管理委員会の役割」
- 閉会あいさつ

○図書の寄贈

岡崎秀紀・市民研究員より、御著書『鳥根とお雇い外国人技術者たち－鳥根の近代化産業遺産物語－』(報光社、2015年)をご恵投賜り、浜田キャンパス・メディアセンターに寄贈図書として配架させて頂きました。

NEAR News 第49号

2016年3月発行

【編集発行】

鳥根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

鳥根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/>